

特集
2

古典の名作に親したしもう



とっつきにくいと思われがちな古典文学。ですが、その「苦手だな」という意識を一度思い切って飛び越えてみると、現代の私たちでも共感できる話が多いことに驚かされます。今回は、そんな古典文学の世界をのぞいてみたいと思います。「あるある!」「それ、わかる!」と思えたなら、きっと古典好きになれるでしょう。解説のヒントも紹介しますので、原文だけでどんな話かわかるようになるまで、繰り返し読んでみてくださいね!

知って楽しい古文の物語

日本の古典文学は、近代文学に対して、江戸時代までに書かれた作品のことを指します。中学生、高校生の皆さんが学習する古典には、古文と漢文の2種類がありますね。古文とは、現代文(口語文)に対して、文語文で書かれたものです。使われている語や文法が現代とは異なります。また、漢文と

は、現代中国文に対して、古い中国の文章、また日本人がそれを真似て書いた文章のことです。

その中でも古文は、昔の日本の人々が感じたことが、ありのままに表現されています。実は読んでみると、共感できたり、思わず笑ってしまったりする話も多いのです。また、月から使者がやって来たり、天女が舞い降りたり、鬼退治に向いたり、そうかと思えば鬼と仲良くなつて一緒に

踊ったりと、現代のファンタジー小説のようなくわくわくする物語もあります。文語文はとっつきにくいかもしれませんが、同じ日本の言葉なので、古語や文法のコツをある程度理解できるようにしたら、物語を十分に楽しむことができるでしょう。

今回は、そんな古文の名作の中から、『枕草子』、『徒然草』、『大鏡』に書かれた3つのお話を紹介しましょう。

『枕草子』

勘違かんちがいしちゃった、恥はずかしい!



原文

はしたなきもの。こと人を呼ぶに、われぞとてさし出でたる。物などとらするをりはいとど。おのづから人の上などうちいひそしりたるに、をさなき子どもの聞きとりて、その人のあるにいひ出でたる。(第百二十三段)

解説のヒント

現代文で「はしたない」といえば、見苦しい、みっともないという意味ですが、古文では「きまりが悪い」と訳します。きまりが悪い、つまり恥ずかしいという意味です。勘違いして恥ずかしい思いをした経験、皆さんにもあるでしょう。ちなみに、「いとどはいよいよ、いっそう」などと訳します。「おのづから」は自然に、ひとりごとという意味もありますが、ここでは「偶然にもしくはたまたま」と訳します。

『枕草子』

清原元輔の娘・清少納言によって書かれた随筆文学です。10世紀末頃に段階的に書かれて、広まっていったとされています。約300段もの章段から成る作品で、その中でも今回紹介した「はしたなきもの」は、ある主題のもとに物事をあげて書く「ものづくし」と呼ばれる章段に分類されます。

清少納言が生まれた清原家は、学者の家でした。彼女自身も教養のある女性で、一条天皇の皇后・藤原定子の女房として仕えます。女房は、高貴な女性の身の回りの世話をしたり、家庭教師のような役割を担っていました。



清少納言 (966年頃~1025年頃)

現代語訳

きまりが悪いもの。他の人を呼んだのに、自分が呼ばれたと思って出しゃばってしまった時。何か物をくれるという時に勘違いしてしまった場合は、いっそうきまりが悪い。たまたま人の噂話などをしていて悪く言ったことを、幼い子どもが聞き覚えていて、その人の前でそれをしゃべってしまった時も、きまりが悪い。

『徒然草』

「えっ、そんな理由だったの？」



原文

丹波に出雲といふ所あり。大社を移して、めでたく造れり。志田のなにがしとかや、知る所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも、人あまた誘ひて「いざ給へ、出雲をがみに。搔餅召させん」とて、具しもていきたるに、おのおの拝みて、**ゆゆしく**信おこしたり。御前なる獅子・**狛犬**、背きて、後ろさまに立ちたりければ、上人**いみじく**感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。**むげなり**」といえ、おのおの怪しみて、「まことに他に異なり**けり**。都のつとに語らん」などいふに、上人なほ**ゆかし**がりて、**おとなしく**物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることに侍らん。ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなきわらはべどももの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、**据ゑ**なほして往にければ、上人の感涙いたづらになりけり。(第二百三十六段)

解説のヒント

泣くほど感動したのに、ただの子どものいたずらだったなんて……。そんな「がっかりした話」が書かれています。「搔餅」は今でいう、ぼた餅のことです。ちなみに、狛犬は、平安時代には左が獅子で右が狛犬と言ったそうです。獅子は口を開け(阿形)、狛犬は閉じています(吽形)。また、狛犬の角角を持っていますが、角が無いものもあります。覚えておきたい古語がたくさん出てくる話です。「めでたし」は立派である、優れているという意味です。「ゆゆし」は、ここでは(程度が)はなはだしいことが伝わるように訳します。「いみじ」は非常に、「めでたし」はすばらしい、「むげ」はまったくひどい、「ゆかし」は見たい、聞きたい、知りたいなどという意味で、その方向に心が引かれている様を表します。「おとなし」は年配だ、「いたづら」はむだ。現代の意味とは異なるので注意です。

文法解説

- ①「ん」は意志や推量を表す助動詞「む」が転じたものです。
- ②助動詞「けり」には、「しした」という過去の意味と、「しだなあ」という詠嘆の意味があります。
- ③「ばや」は終助詞で、動詞や、動詞型活用の助動詞の未然形に付きます。ここでは「しできたらなあ」や「しいたい」と訳しましょう。連語の「ばや」(接続助詞「ば」+係助詞「や」と混同しないように注意です。連語の「ばや」は未然形に付く場合、「もししならしだろうか」と訳します。已然形に付く場合は「しだからしだろうか」です。疑問を表すのが連語の「ばや」です。

『徒然草』



吉田兼好
(1283年頃～1352年以降)

1330年頃に成立した随筆で、作者は吉田兼好(下部兼好)です。『枕草子』や『方丈記』と合わせて日本三大随筆に数えられます。全部で244段の短い章段で構成されています。序段の「つれづれなるままに」は特に有名ですね。文体は、和文と漢文が合わさった和漢混淆文と、仮名文字が中心の和文が混在しています。

兼好は、京都の吉田神社の神官の子として生まれました。宮中に出仕していましたが、後に出家して法師となります。『徒然草』には、王朝風の雅やかな好みや、人としての振る舞いについて書かれています。

で、不思議に思いませんか? (不思議に思わないなんて)まったくひどい」と言うと、一同は不思議がって、「本当に他の獅子と狛犬とは違うなあ。都への土産話にしよう」などと言うと、上人はなおのことその理由を知りたがって、年配で物知りらしい神官を呼んで、「この御社の獅子の立てられ方は、きっと何かいわれがあるのでしょうか。ちょっと承りたいものです」とおっしゃると、「その事でございます。いたずらな子どもがいたしましたことで、けしからんことでございます」と言って、獅子と狛犬に近寄り、元通りに置き直して行ってしまったので、上人の感涙はむだになってしまったそう。

丹波の国に出雲という所がある。出雲大社の御神霊をお迎えて立派に造営した神社だ。志田のなんとかとかいう人が治めている所で、秋のころ、(その志田のなにがしが)聖海上人や、そのほかの人々もたくさん誘って、「さあいらっしやい、出雲の神様を拝みに。ぼた餅をご馳走しましょう」と言って連れて行ったところ、皆が参拝して大変深い信仰心を起こした。拝殿の前にある獅子と狛犬が、背中を向け合って、後ろ向きに立っていたので、上人がたいそう感心して、「ああ、すばらしい。この獅子の立ち方は、とても珍らしい。深いわけがあるのだろう」と涙ぐみ、「何とまあ、皆さん、このすばらしいものをご覧になっ

作品について

現代語訳

『大鏡』

「～」が「～」の形は古文ではよく見られる形の一つです。



原文

さるべき人は、**とうより**御心魂のたけく、御守りもこはき**なめり**とおぼえはべるは。花山院の御時に、五月下つ闇に、五月雨も過ぎて、いと**おどろおどろし**くかきたれ雨の降る夜、帝、**さうざうし**とや思しめしけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊あそびおはしませけるに、人々、物語申しなどしたまうて、昔恐ろしかりけることどもなどに申しなりたまへるに、「今宵こそいと**むつかし**げなる夜なめれ。かく人がちなる**だに**、**気色おぼゆ**。まして、もの離はなれたる所など、いかならむ。さあらむ所に一人往いなむや」と仰せられけるに、「えまからじ」とのみ申したまひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなむ」と申したまひければ、さるところおはします帝にて、「いと興きやうあることなり。さらば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君達は、**びんなき**ことをも奏そうしてけるかなと思ふ。

解説のヒント

後に左大臣という高位にまでのぼりつめる藤原道長の、若い頃のエピソードです。

一文目に出てくる「とうより」は、「疾うより」と書きます。早くからという意味です。この場合、(道長が)若いころからと訳してもいいでしょう。「おどろおどろし」には、大げさだという意味もありますが、ここでは恐ろしい、**気味が悪い**です。「さうざうし」は騒々しいとは訳しません。もの足りない、**心ざびしい**という意味です。「むつかし」は**気味が悪い**、「気色おぼゆ」は物恐ろしく思われると訳しましょう。「びんなし」は便無しと書き、ここでは不都合だ、けしからぬという意味になります。「奏す」は、(天皇や上皇に対して)申し上げると訳します。ちなみに、歌を詠んだり、管弦を奏なでたり、舞いなどをしたりすることは、平安時代の貴族たちの「遊び」でした。「塗籠」は四方を壁で塗り込めた部屋で、衣装入れや寝室として使われていました。

文法解説

- ① 連語の「なめり」は、断定の助動詞「なり」の連体形に、推量の助動詞「めり」が付き「なるめり」となったのが転じて「なんめり」となり、「ん」が無表記となった形です。「～であるようだ」と訳します。
- ② 副助詞「だに」には、「せめて～だけでも」や「～さえ」「～なら」などと訳せます。下に続く文章が意志なのか打消しなのか、文章中の表現が仮定なのか読み取り、それに合った訳し方をしましょう。
- ③ 「えゝ打消し」の形は古文ではよく見られる形の一つです。「到底～ない」や「～できない」という意味になります。

『大鏡』

作者未詳の作品です。1025～1134年の間に成立しました。この作品は俗にいう「かみもの」で、『今鏡』『水鏡』『増鏡』と合わせて「四鏡」と呼ばれています。話は、190歳と180歳という大変長寿な二人の老人が語り合う形式で書かれています。藤原道長を頂点とする藤原氏の歴史が語られていて、基本的には今回紹介した話のように、道長を褒め称えている内容です。藤原道長は天皇に代わって政治を行う摂政の家に生まれましたが、五男であったこと、道隆や道兼といった有力な兄たちがいたことなどで、初めは目立たない存在でした。しかし、兄たちが病没してしまい、また道隆の息子である伊周との争いに勝って、ついには左大臣となって政権を掌握しました。



藤原道長 (966～1028年)

作品について

現代語訳

そうなる(偉くなる)はずの人は、若いころから**能力**が強く、神仏の加護も強いものと思われる。花山院の御時のこと、五月下旬の闇夜で、梅雨の時期も過ぎたというのに、たいそう**気味悪い**ほどに激しく雨が降る夜のこと、帝(花山院)は心ざびしく思いになられたのか、殿上の間にお出でになり、管弦遊びなどをされ、人々がいるいろとお話を申し上げているうちに、昔の恐ろしかったことなどをお話し上げると、帝は「今夜はひどく**気味の悪い**夜であるようだ。こうして人が大勢いてさえ、不**気味**な感じがする。まして人気のない遠い場所などは、

どれほど不**気味**だろう。そんな所に一人で行けるだろうか」とおっしゃったので、「(不**気味**なので)参れますまい」とばかり人々が申し上げたのだが、入道殿(道長)は、「どこへでも参りましょう」と申し上げなされた。そういうことをおもしろがられる帝だったので、「とてもおもしろいことだ。それなら行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」とおっしゃったので、ほかの公達は、道長はけしからぬことを申し上げたものと思った。